モンスーンアジア諸国における空間言語（地形名）から見た環境観の地域比較

1．研究組織

研究代表者：齊木　崇人（神戸芸術工科大学芸術工学部・教授）
研究分担者：井上　民二（京都大学生態研究センター・教授）
遅沢　克也（愛媛大学農学部・助手）
渋谷　鎮明（神戸芸術工科大学芸術工学部・客員研究員）

2．研究のねらい・目的

本研究は、モンスーンアジアの多様な環境観（自然観・世界観）の解明とその比較を目的として、各々の地域で使用されている諸言語に着目し、その環境観を最も反映している空間言語（地形名）を調査研究の素材とする。空間言語はここではある言語に含まれる地形名・小地名を指しているが、これは使用する民族が経験してきた自然環境と、その自然環境に働きかけた営為（順応、改変、あるいは順応しつつ改変するなど）を反映している。これらの分類と比較研究を通じて、モンスーンアジアの各民族の空間言語（地形名）の特性と環境観の相違点を明らかにし、あわせてモンスーンアジアの共通する環境観を探求し、人類が生き残るための自然と人間の共存哲学を提示することを究極の目的とする。

3．平成８年度の研究経過

上記の目的を達成するため、室内作業（空間言語の抽出）、および現地調査を行うとともに、A 01「地域と生態環境」班の合同研究会に参加し、発表・討論を行った。

(1) 空間言語の抽出

昨年度に引き続き、ベトナム語とインドネシア語について、最も信用の置かれている現地語による国語辞典を用い、当該言語を母国語とする研究者の協力を得て、空間言語（地形名）の抽出と分類・整理を行った。

ベトナム語については、当該言語を母国語とする研究者の協力のもと、ベトナム語の国語辞典である『Tu Dien Tieng Viet』（1995 年度版）を用い、また『越日小辞典』（竹内与之介編、1986）と『Tu Dien Han-Viet Hien Dai（現代漢越辞典）』(1994 年版）を補助的に使用して、

空間言語（地形名）の抽出と日本語訳、そして分類・整理よりベトナム語の空間言語より読みとれる環境観を把握することにつとめた。辞書と研究協力者の選定に時間を要したため、現在のところ分類・整理中である。しかし抽出された空間言語をみると、語彙の中に漢字語（漢越語）が多く、以前、齊木・渋谷で研究を行ったことのある韓国・朝鮮語の空間言語のありかたと類似している。

インドネシア語については、やはりインドネシア語を母国語とする研究者の協力を得、空間言語の抽出と日本語訳、分類整理を行い、そこにあらわれる環境観の把握に努めた。空間言語の抽出には、『Kamus Bahasa Indonesia』（1995年度版）を、抽出された語の日本語訳には『標準インドネシア・日本語辞典』（谷口五郎編、1988）を用いた。インドネシア語についても現在のところ抽出された空間言語の分類・整理中であり、ベトナム語とともに最終報告書にて報告の予定である。

(2) 現地調査

昨年度予備的な調査を行ったベトナムの集落の中から、ベトナム北部の観光地、ビックドン近くのホアルー省リエンチュン村とイェンバイ省チャー村の２つの村について、現地調査を行った。調査は1997年３月８日～13日にかけて行った。

リエンチュン村はベトナム北部の観光地、ビックドン Bich Dong（碧洞・碧崗）より、約２～３ｋｍほどの距離に位置し、人口は4982人、1423世帯が居住している。この地域の地形はカルスト地形であり、河川によって浸食されて形成されたトンネルをくぐりながら北西から南東方向に向かう谷が幾筋も並んでいる。本来ビックドンもそれらの谷のうちの一つを指す呼称であるが、その一本南側にある谷の入口付近にリエンチュン村は立地している。村はダムケー・ノイ Damkhe-noi、ダムケー・ンガイ Damkhe-ngoai、コーイ・ヘー Coi-khe、の３つの地域よりなり、今回は最も谷奥側にあるダムケー・ノイにおいて、居住環境、集落と住居の構成、住居の立地選定、集落内および周辺の小地名と生業との関連について調査を行った。

ダムケー・ノイの集落は、上記の谷の入り口付近の低湿な平地中の微高地に立地し、東側にはDang-ma（墓の野原）と呼ばれる岩山を控えており、その名の通り岩山の下には墓地が広がっている。またこの集落には約1200人が居住し、生業は水田耕作が中心である。この集落の敷地地割は格子状であり、おおよそ一つの敷地に対し一つの池が付属している。その敷地内に建てられた家屋の向きと池のある方向、および建築物の建築年代などより、微高地の中心部から次第に周辺部に家屋が展開していったことが推測され、微高地の中でも微妙な高低差が認識されていたのではないかと思われる（図１）。

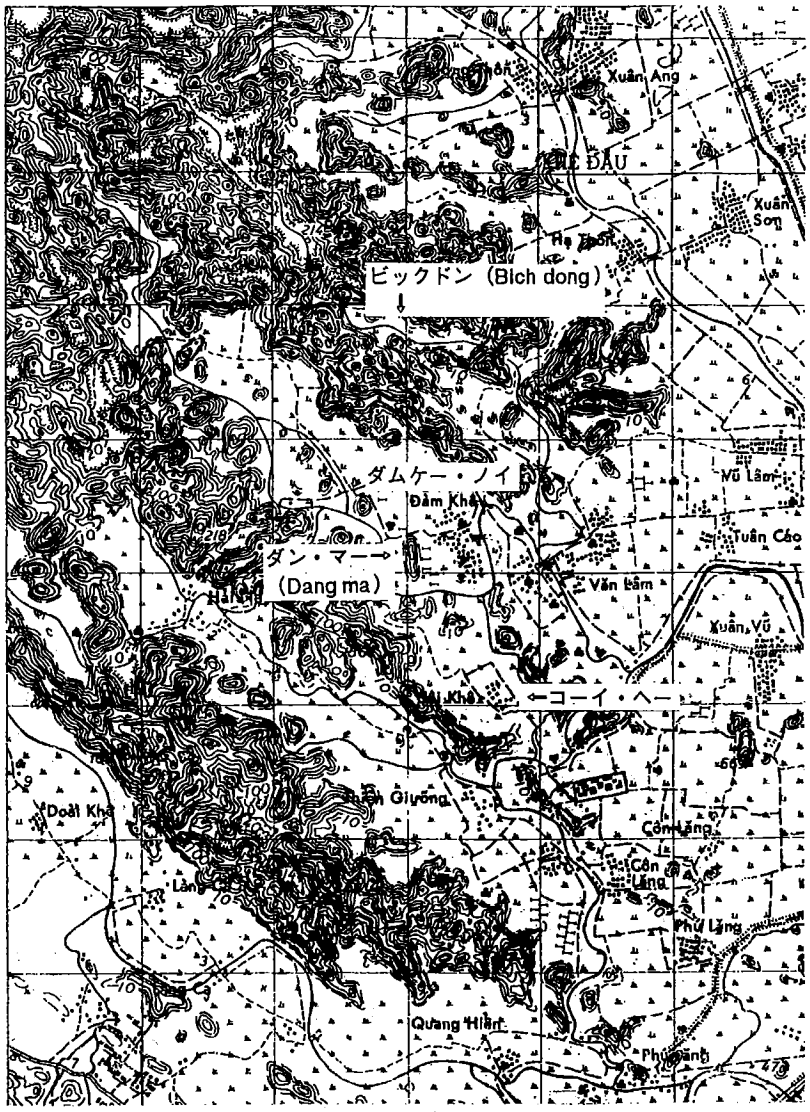

図1　リエンチュン（蓮中）村ダムケー・ノイ周辺

（1978年作成、1：50000）

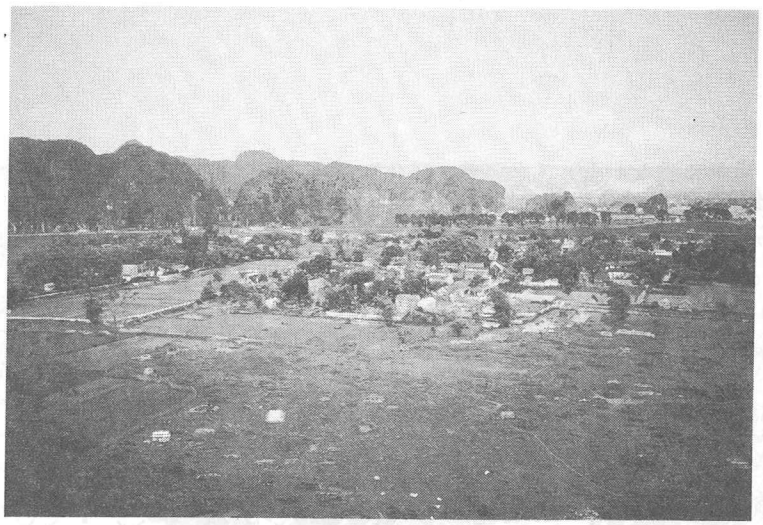

写真1　ダン・マーより望むダムケー・ノイ全景

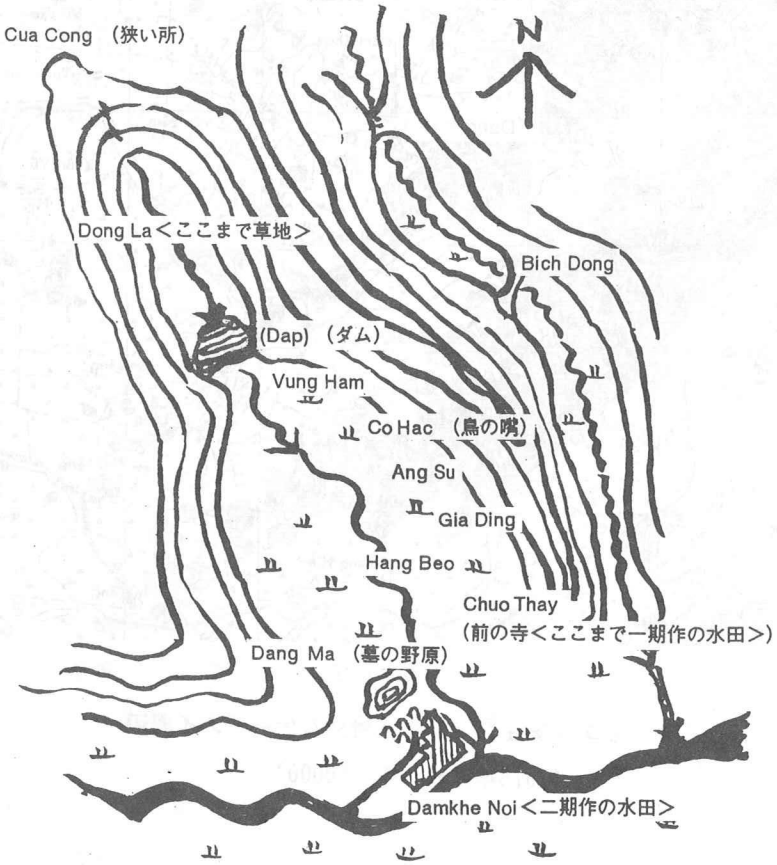

図2　ダムケー・ノイにおける小地名と農地の利用

写真２　ダムケー・ノイの民家と池

写真３　池での魚とりの風景（ダムケー・ノイ）

またこの集落の住民がかかわる農地が谷の奥へと延びているが、・水田に利用できない草地、・一期作の水田、・二期作の水田の三つに分類され、その際に図２のように、小地名がその土地利用の認識の一つの単位として用いられている例が確認できた。

ベトナム北部イェンバイ省のチャー村 Thon Cha は、ヌン族の居住する集落であり、家屋の全てが高床式住居である。この集落の多くの家はここ 10 年以内に建てられたもので、古いものでも 60 年前後である。また家屋の構造自体も、高床の家の上部が切り放し可能であり、家ごとの移動が可能である。何らかの理由でそのような移動が行われる際の住居の立地選定の判断基準としては、水の便、道路に近いこと、風の方向を重視するとのことであった。また今回調査することのできた家屋は、おおよそそれらの家屋は、水田として利用される川沿いより数ｍ高い尾根上のわずかに南よりに立地している。また、山麓に立地する場合には池が付属する場合が多かった。

(3) 研究会への参加

上記の研究活動のとりまとめを兼ねたＡ 01 班の合同研究会（２月 15 ～ 16 日）に参加、討論を行った。２月 15 日の研究会では研究分担者である遅沢が、インドネシア・スラウェシ島の造船技術者集団について発表し、討論を行った。また 16 日にはＡ 01 班全体の研究とりまとめの方針とそこでの本研究課題の位置づけ、および研究の進捗状況について報告・討議を行った。

写真４　小さな丘の上に立地するチャー村の高床式民家

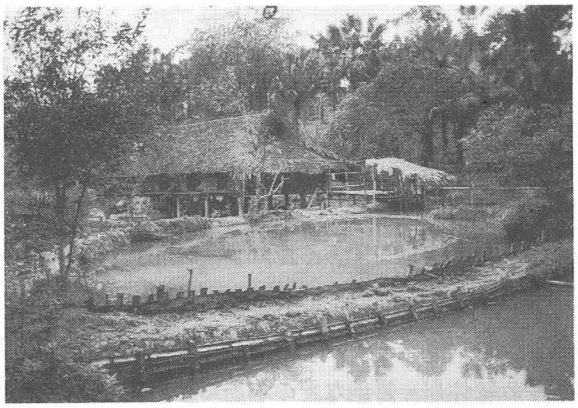

写真５　前面に池を持つチャー村の高床式民家

写真６　しとみ窓から顔をみせるヌン族の家族

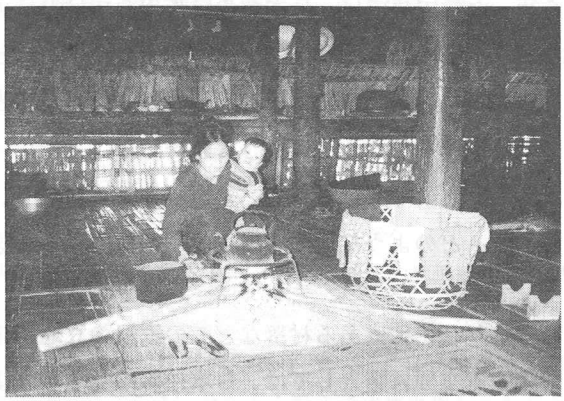

写真７　高床式民家の中央にある囲炉裏に薪をくべるヌン族の親子

4．研究の成果とフロンティア

本年度の研究を通して、本研究の目的である空間言語を用いた環境観へのアプローチについて、以下のような知見が得られた。

本研究では環境観とは、ある地域の人々に・共有化され、・引き継がれる価値や空間観であると考えている。そしてそれは住居・耕地などの場所の選定がなされるための根拠となり、さらにそれを引き継ぐという機能を持っている。そのような環境観にアプローチするため、本研究では共有化され、引き継がれる空間言語を扱ってきた。この空間言語は、さまざまな自然環境を指し示す言葉のうち、地形名、小地名、方名などの地形や空間に関するものを示している。このうち、本研究では当初より辞書などで抽出可能な各言語ごとの地形を指し示す言葉である「地形名」に着目してきた。

このような辞書などから抽出した地形名を分類・整理し、抽出された地形名が具体的にどのような地形を指し示しているのかを明らかにすることによって、その言語を用いる人々に共有化され、引き継がれてきた空間言語（地形名）を抽出でき、そこから非常に大まかではあるが、当該地域の人間と環境とのかかわり、いわばマクロスケールの環境観の輪郭を大きくとらえることができるのではないかと考えられる。具体的には、・ひとつの地形に対する言葉の偏り（一定の地形に対する語の多寡など）、・地形学などで用いられる学術用語ではとらえきれない地形名、あるいは・頻出する語（接頭・接尾語など）を把握することを通して、当該言語を使用する言語集団のなかで重要視される地形や場所、自然環境の利用や認識に関わる重要な語とその指し示す地形・場所を抽出できるのではないかと考えられる。これによって当該地域の自然環境をとらえるための大まかな指針が得られるのではないかと考えている。たとえば、以前筆者らが同様の研究を行った韓国語では、日本語や学術用語ではとらえにくい、「海辺の干潟から河口付近のおもに砂で形成された平地」を意味する「ケ gae」という地形名が抽出できたが、これは朝鮮半島西海岸から南海岸にかけての遠浅の海岸の利用と生業、景観などと密接な関係を持っているものと推測される。このような語を知ることによって当該地域の地域環境を理解するための一助となるものと期待される。また現地調査により、このような語が実際にどのような場面で用いられ、どのような地形を指し示すものであるかを確認する必要があると思われる。

一方で、より生活に密着した、例えばある村落などでの家屋の立地選定や土地利用に関わる小スケールの環境観に対応する空間言語としては、日本における字名のような「小地名」、あるいはそれよりも多少広く使われる地形の「方名」などを拠り所にして行く必要性があると思

われる。そのため、前記のような現地調査において、小地名の採集を試みた。

このような小地名は、ある小地域において共有化され、引き継がれて行く一定の地形や場所に関する認識や評価を含むものであり、当該地域の生業や生活と密接に関連している。したがってこのような小地名の採集と分析は、人間活動と自然環境の関連を小スケールで理解するためのひとつの手段として有効であると考えられる。また本来建築学分野において当初「空間言語」として取りあげられたものは、このような小地名が中心であった。

たとえば今年度調査を行ったベトナム北部リェンチュン村では、前記のように小地名が土地利用や水田耕作を行う場所を認識・分類するための一種の単位、あるいはラベルとして用いられており、小地域の環境利用を理解するための一助となりうることが明らかになっている。

本研究ではこのような広く地域環境全体をとらえる視点としての辞書によって抽出される「地形名」、そして小地域の人間と自然環境（特に地形）のかかわりをとらえる視点としての「小地名」について研究を進め、空間言語を用いた地域環境の理解のためのひとつの指針を示し得たものと思う。しかしこのような言葉だけを用いる方法には限界もあり、またそれらの空間言語の背景、たとえば開発の歴史、生産活動などに関する広範な理解なしでは、重要なキーワードが抽出できたとしてもその重要性を見落としかねない。この点については十分留意する必要があるであろう。

5．メンバーの研究業績

齊木崇人

「自然知の住まい」『すまいろん』（住宅総合研究財団）37: 4-7, 1996.

「中国・江南地域の農村集落・居住空間の秩序――東アジアの集落・居住空間研究 13-18 ――」（渋谷鎮明ほかと共著）『日本建築学会大会学術講演梗概集』E-2: 513-524, 1996.

「ベトナム紅河流域、インドネシアスラウェシ島における予備調査報告」（渋谷鎮明と共著）『日本熱帯生態学会ニュースレター』23: 5-8.

「風水――場所選びの環境観――」『総合的地域研究』14: 24-25, 1997.

渋谷鎮明

「朝鮮（李朝）時代末期郡縣図の表現方法にみる風水地理的地形認識」『歴史地理学』（発表予定）, pp.39-3, 1997.

「中国・江南地域の農村集落・居住空間の秩序――東アジアの集落・居住空間研究 13-18 ――」（齊木崇人ほかと共著）『日本建築学会大会学術講演梗概集』E-2: 513 ～ 524, 1996.

「ベトナム紅河流域、インドネシアスラウェシ島における予備調査報告」（齊木崇人と共著）『日本熱帯生態学会ニュースレター』23: 5-8.